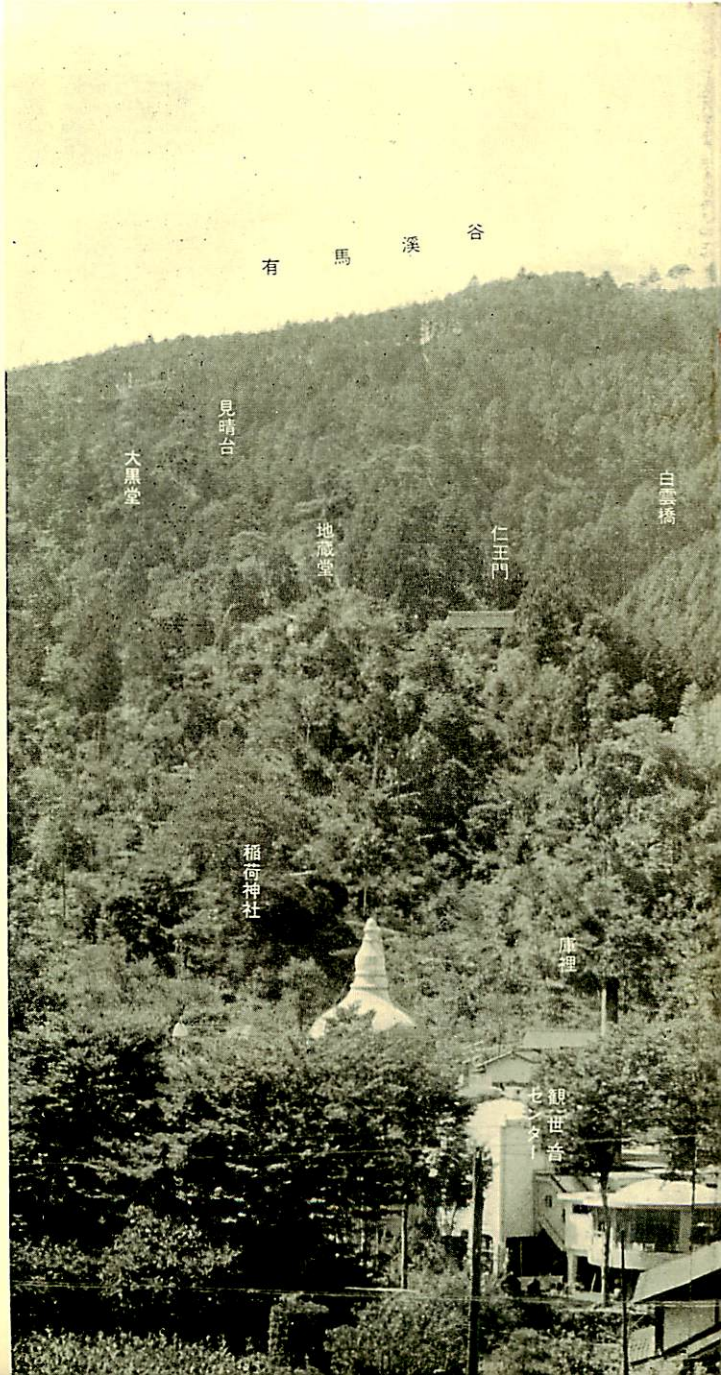


白雲山 鳥居觀音のしおり 13

昭和四十五年一月一日發行



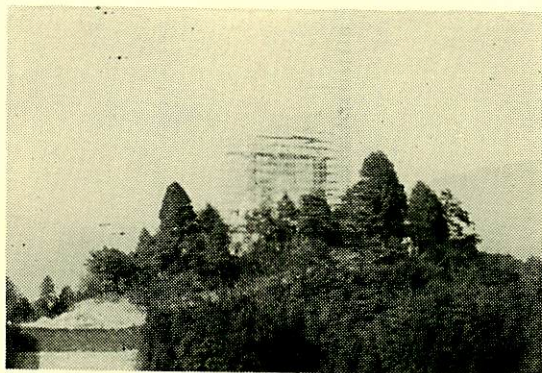
# 賀正

福は内

鬼はどこにもいぬの歳

(諸井恒平翁作)

## 大観音



白雲山の最も見晴らしの良い霊域、  
面白岩台地に建立中

基壇 堂宇 高さ 十米  
中央大観音 高さ 二十一米

## 一萬体観音

表面



基壇堂宇内の壁面に有縁の方々のご先祖様のご靈位を記入した身丈三〇センチの観音様一萬体を奉安して、永代供養を致すべく発願致しました。この見晴らしの良い、台上霊地はきつとご先祖様にも、およろこび頂けることと存じます。寺務所にて御申込を受付けておりますので、お早めにお申し込み下さるよう勸進申し上げます。

裏面





## 印度附近の旅路

(其の三) 桐江

### 玄奘法師の天竺入り

白雲山頂に、玄奘三蔵法師の靈骨奉安の大塔を建立した因縁の深い私としては、今回の旅行で、玄奘の御足跡に、いたく興味をそられました。

玄奘法師が、唐の国禁を犯して密出国をして、魔物の様なゴビの砂漠や氷河で覆われた天山山脈等幾多の困苦をのり越えて、三年目に待望の天竺なる印度の地を踏まれた感激は、ひとしお深いものがあつたと思いますが、ここでは、玄奘が最も永く仏典を勉強し、釈迦の遺跡をくわしく巡礼された附近の御足跡と、釈尊の三大聖地（誕生、成道、涅槃）を中心に略記してみます。

### 曲女城のいわれ

玄奘がガンダーラ仏跡を巡拝して漸く印度の中央、カシヤトクブシャ（今のカージユ）と云う美しい城下町に辿りつきました。

カシヤトクブシャとは、「腰の曲つた女達の町」即ち曲女城と云う意味です。

玄奘は、西域記に次のように書いております。

「人間が数百年も生きることの出来た昔のこと、その王様は、千人の王子と百人の美しい姫があつた。

ところが王城のなかを流れるガンジス河のほとりに何万年も齢を重ねた、大樹仙と云う仙人がいて、一羽の鳥が仙人の肩に木の実を落し、それが芽を吹き大木となつていた。ある日多くの姫君達がこの森にきて遊んでいるのを、この仙人がみて王様に、

「姫君の内一人を嫁にくれ」と申し込んだので、王様は姫達に仙人の嫁に行つてくれと頼んだが、皆断つたので、王様があとの崇りを恐れ心配していると、その様子をみかねて、まだ十歳にもならない幼い姫が、

「私がお嫁に行きます」と云つたので、王様がこの末姫を仙人のところにつれて行つたところ、仙人は非常に怒つて、

「何故このように幼いものを」となじつたので、やむなく王様は、

「他の姫達が承知しないので」と答えたため、仙人は「よし他の九十九人の姫達を、腰の曲つた、みにくい姿にかえてやる」と云つて呪文をとなえた。

王様が心配して急いで王宮に帰ってみると、矢張りその通り、九十九人の姫君達は、皆腰の曲ったみにくい姿になっていた。そこでこの城の名が曲女城と云うようになった』と云うのですが、今尚曲女城（カージユ）の地名は残っています。

## 戒日王

玄奘がこの曲女城を訪れた時は、釈迦入滅後一千二百年経っており、印度最大の戒日王（ハルシヤ）の時代でした。

その兄王は賢明の聞えが高かったので、隣国である東印度の金耳国王は之を恐れて兄王を宴会に招いて毒殺してしまつた。

そこで其の弟が王位につき、戒日王となつたが兄王を殺した金耳国と戦う決意をしてガンジス河岸の観世音菩薩の像の前



ガンジス河の受難（白雲山 三蔵塔内壁画より・児玉希望画）

で断食苦行をし、観音のお告げにより大王の称号（獅子座）には就かず、戦力をねり遂に仏法の敵たる金耳国王を亡ぼしました。

戒日王は風采堂々として智徳非凡の人で、後には象軍六万、馬車十万、歩兵五万と云う兵力をもつ大王となりました。

戒日王の施政は、肉食殺生を禁じ、布施をなし、塔や寺をたくさんたてる等、仏教を中心としたものでした。

## ガンジス河舟中の受難

玄奘は、ここに三ヶ月ばかり滞在して旅立ち、幾つかの国を通つて、八十人ばかりの人々と、舟でガンジス河を下つた時、兩岸は昼なおくらいほどの密林の処で、待伏していた十余隻の賊舟におそわれ、衣類や金品をうばわれて丸裸にされました。

ところがこの盗賊が信仰している。ヒンズー教のシバの神の残忍な妻カリ女神に美しい男の肉と血をささげて、祈る習慣があつたので、その生贄いけにえに美貌の玄奘が選ばれたのでした。

賊達は河岸の林の中に祭壇を造つて玄奘をのせ二人の賊が抜刀して、犠牲の式が始まりました。

すでにこの身はなきものと諦めた玄奘は、泰然自若たいぜんじじやくとして、

「ねがわくば浄土に生れ代つて悟を開き、再びこの世に来て、この賊共のような悪人を教化して、善行に導かん」と一心不乱にお経をとなえ祈りつづけると、不思議や、玄奘の身は軽々と天空に浮び、大歡喜にみち、殺される寸前にあることも全く忘れていました。

この時天は俄かにかきくもり、大嵐となり、ガンジス河に波が湧き立ち、舟が皆くつがえたので、賊達はおどろき、おののいて、玄奘の前にひれ伏して陳謝し、二度と悪事はしないと云つて、武器を河に投げ込み、うばった品を皆持主に返したので、嵐もおさまったとの事です。

この話は日蓮上人の竜の口の法難によく似ています。

### ヒンズー教の迷信と苦行

玄奘は無事、ガンジス河と、チムナー河の合流点、(ベナレスの上流約百哩)につきました。

ところが、ここで溺死した者は、天国で生れ変ると云う、ヒンズー教の迷信から、七日間断食して水中にとび込んで死ぬ者が、毎日数百人を下らなかつたとのことです。

又苦行者が河中に高く柱を立てて、早朝から一方の手足で柱をささえ、他方の手足で、太陽と共にひまわりの花のように夕方までまわるとか、終日水中にひたるなど、色々の難行苦行をしている者がいるのを、玄奘法師がみておどろきました。

### 祇園精舎と舍衛城

その近くにコーサラ国の首都舍衛城があり、又祇園精舎があります。

祇園精舎には一千人の人を殺して、その指で髪飾りを造ろうと誓った外道げどう(アンヌイマール)が千人目に母を殺そうとした時、釈迦にとめられたので、釈迦まで殺そうとしたが、その有難い説教をきいて遂に仏道に帰依したと云う名高いところです。そこには高い塔が残っているそうです。

スタッタと云う長者は、釈迦のためにお寺を建てることを決意し、その場所がジェータ王子の所有林なので、王子にお願いしたところ、王子は隙間なくその土地にお金をしきつめたら、売てやろうと、たわむれに云ったところ「お金ですむことなら」とその土地に金貨をしき始めたので、王子もおどろいて、

「仏法はよい田です。よい種子をうえたら、ますます

良い実りがあるでしょう、一人でお寺をたてましよう」とその土地を寄附し、長者は立派なお寺を建てたので釈迦は土地を寄附したジュータ王子と、長者の名をとって、「きじゆたうごえん祇樹給孤獨園」と名づけたのが、祇園精舎となつたのです。

釈迦が、「仏教がこの国から滅びる時があるう」と予言された如く、釈迦入滅後千二百年で、玄奘が見たこの舍衛城も、祇園精舎も、荒れ果てておりまして、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきあり」の現実を見られた玄奘は、仏法のすい退をなげき悲しまれました。

私達もデリーへ行く飛行機で、この近くの飛行場に着いたのですが、祇園精舎の名前は、土地の人も知らぬ程印度から姿を消しており、礎石の一部が残っているだけだとのこと、釈迦の予言通りになっているのが何だか淋しい感じがしました。

今は祇園精舎の名は、日本だけでも知れませんが。

祇園精舎の境内には、深い穴が三つあります。その一つは、釈迦の名声をねたんで、つめに毒をぬり、釈迦を殺そうとした瞬間地獄におちた穴、又これに味方して、釈迦の悪口を云つたためおちた穴と、釈迦の教えが広まるのを妬み、お腹に木のお盆をあてて妊娠と

みせかけ、釈迦を指さして、

「この法をとく男がわたしと密通した」と叫んだ、その時、帝釈天が白ねずみに化けて、ひもを喰い切つたので、盆が地におちると共に地獄におちて行つたと云う三つの穴の事を、玄奘も西域記にかいておられます。

### 釈迦族の滅亡

このコーサラ国、舍衛城の勝軍王は、何とか釈迦に來てもらおうと念願した結果、釈迦族の王女に結婚を申し込んだが釈迦族は階級（カースト）が上位なので王女はこれを承知しなかつたので、やむなく奴隷の女を、釈迦族の王女と云うことにして、勝軍王の嫁に送りました。その間に生れた王子ハルダカが母の里の釈迦族を訪問したところ、奴隷の子だとののしられたので、王は怒って大軍を率いて、釈迦の生れた国、釈迦族のカセラバットにおしよせました。

その時釈迦は唯一人、通り道の枯木の下に正座しておられたので勝軍王は、

「何故枯木の下におられるのか」と尋ねると、

「一族は樹木の枝葉のようなものだ、これで滅びてしまふだろう、だから枯木の下にいるのだ」と 釈迦が答えたので、王は一度は軍を引き返し帰国したものの、

再び出陣して釈迦族を滅ぼし、五百人の美女を選んで舍衛城につれ帰ったが、彼女達はブライドが高く、皆王をのしつたので、激怒した王は、この美女全員を虐殺してしまいました。しかし勝軍王も呪われて焼死し、コーサラ国もマガダ国にはろぼされました。

この釈迦族の全滅は釈迦八十年の生がい中最大の悲げぎでした。その他釈迦が仏教とゆう新宗教の布教をしたため、他宗教や、外道から迫害をうけ、非常な苦難の道を迎えられた事例は沢山あります。

玄奘が、この釈迦の故郷、釈迦族のカピラ城に辿りつかれた時には、王城の跡は荒れはてて全く廃墟と化しているし、釈迦出生の地、ルンビニーの森も、枯木となっていたと、玄奘は無情を感じられております。

### ブダガヤ大塔の十日間

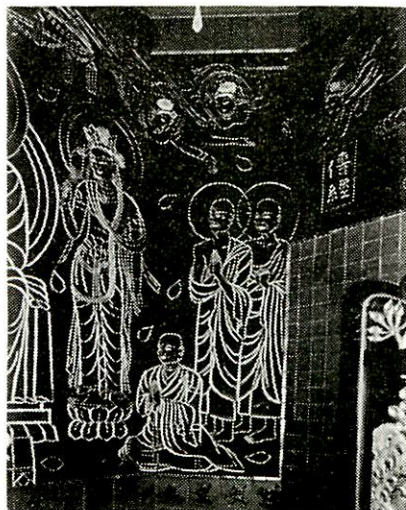
玄奘がこの荒れはてた祇園精舎等をあとに旅をつづけて、漸く釈迦成道の地、ブダガヤの大塔に辿りつき感激のあまり、金剛法座で十日間も嗚咽しつつ、座禅し礼拝されたとのことですが、これは私がこの大塔に辿りついて礼拝した時の感激と思いくらべて、もっともだと察しがつきます。

### ナーランダ大学と戒賢長老

その時、ナーランダ大学の総長格の碩学者、戒賢長老から使者が見えたので、玄奘は大塔に別れを告げてナーランダ大学を訪れました。当時の大学は四階建てで丹青で彩色され、到る処巧みな彫刻が施され、八十余尺の銅の仏像や六層の重閣等で実に豪華な殿堂に玄奘も目を見はらせられたとの事です。

この大学は印度の最大の権威であっただけに、印度中の大学者が集っていたのです。

戒賢長老は百才を過ぎておられたのですが、三年前



ナーランダ大学における伝教  
白雲山 三蔵塔内壁画より 児玉希望画

支那の僧が天竺に来る夢を見たのでまっつとおったと非常によろこばれました。三年と云えば玄奘が唐を出発した時ですから不思議と云うべきです。

玄奘は、大きな個室を与えられ至れりつくせりの待くうをうけて戒賢長老につき、五年間みっちり勉強しました。

## 印度一週の旅

そこで戒賢長老から帰国をすすめられたので、国への土産に印度一周の旅をしようと思ひ立ちました。

先ず東インドから漸次南に下り、セイロン島に行く考えでしたが、折からセイロン島は内乱で大変な騒ぎだとのことで、これをあきらめデカン高原を横切り西海岸を廻り、再びナーランダ大学に帰ったのは足かけ四年という大旅行でした。

そして二十数ヶ国と、性格の異った異様な民族に接したり、不思議な信仰におどろいたり、ジャングルでは猛獣に至る処で出会い、度々盗賊の難に会いながら赤道直下の炎熱の中を仏跡の巡礼をしたと云う、この千二百年前に書かれた西域記は中国人にはアポロ十一号以上のおどろきと興味を以て読まれて、「西遊記」と云う有名な小説の種子本になったのも、もっともな

ことだと思ひます。

殊に感心したのはA地からB地迄西方何百里と云うふうに、皆書いてあるのが、ほとんど正確だったのは歩数で計算したのだとも云われております。

## 玄奘のうばいあい

玄奘が長老戒賢の許しを得て、いよいよ帰国の途につこうとした時、ガンジス河の東方地区の大国のクアラ王の使が、ナーランダに来て、

「弊国の王が、支那の高僧にお目にかかりたいと申す故、ご派けんねがいたい」と申しこんだが、玄奘は帰国を急いでいるのでと断わり、二回目の強い要求も断わったので、三回目には、

「もし今度も断るなら、大軍を以てナーランダ大学を粉砕するぞ」と云う、最後通牒なので、戒賢長老も、クアラ王が、玄奘の高徳のうわさをきいて、何とかしてもその法話をききたいと熱望するのも、前世の因縁である。として玄奘に行くことをすすめたので、王は大いよるこび、群臣を率いて出むかえ、最高の待くうをうけて一ヶ月も滞在しました。

ところが戒日王は隣国討伐を終り帰国すると、玄奘が、クアラ王のもとにいとくときいて、



「自分が招いても来なかったのに」と非常に怒って、クアラ王に、

「すぐ玄奘を当方に渡せ」と申しこんだ。ところがクアラ王は

「私の首をとることは出来ても、支那の僧をうばうことは出来まい」と断ってきたので、戒日王は使者に、「クアラ王の首を渡すと申された故、使の者にその首をもたせてほしい」と申し入れたので、クアラ王も大いにおそれ、玄奘をつれてくることを約束しました。

そこで戒日王は数千の炬火をともし、数百の金鼓手をとめない、王の一步ごとに鼓を一げきさせる恒例の「節歩の鼓」をならして、迎えに出て来た。

この節歩の鼓は他の王たちには許されなかったものだそうです。

### 玄奘最大の盛儀

ところが小乗教の僧は七百項もある「破大乘論」をもち出して、大乘にその一項でも論破しうる者があつたらお目にかかりたい、とほこらしげに云ったので、戒日王は怒りこれを玄奘に語ったところ、玄奘の

「大乘教」(乃ち破悪見論)は「日光の前では螢は光

をうばわれ、大雷がとどろけば、かなづちの音もなくすことが出来る」と論じたので、戒日王も感心して、他国には迷のさめぬ者が多いので、全印度の仏僧、バラモン、外道等にこの大乘の微妙さを説き、彼等の増長慢をくちいてやりたい、と諸国に使を出して、「各派の教えに通じたものは、ことごとく曲女城(カージュ)に集り、支那僧の大法の論をきけ」と通達しました。

集まった者は、十八ヶ国の王様や、仏僧三千余人、バラモンとその他の人々二千余人以上で、ナーランダ



盛儀  
白雲山 三蔵塔内壁画より 児玉希望画

大学からも千余人も参加したが、皆相当の大学者で、従者を入れると、おびただしい数に上り、象の大群等で、数十里の間が埋まったほどの盛観でありました。そして玄奘は十八日間連続の大乗仏教の法話をしたが、誰一人として反論する者がなかった、と云われま

す。其時の盛儀の様子は、戒日王は帝釈天に、クアーラ王は梵天に扮し、黄金の仏像をのせた、満鑑師の巨象の左右に侍して進み、高僧や、各国の王や楽人等が、数百の満鑑師をした象で従いました。

この盛儀は、玄奘一代の内最高の感激であったようです。

しかしこれには、他宗や、外道のそねみ等もあり、色々の問題が起っております。

そのあとで、戒日王は、上流のガンジス河と、マムナ河の合流点にある霊場で、五年に一回の布施を行ったが、全印度から集まった群衆は五千万と云われて、さすがの戒日王も十日間にわたる布施で、莫大な財産も全部つき、王も身につけた装身具から服までも与えて、残ったものは象と兵器だけになってしまい、妹から粗末な破衣をもらって身につけたほどでしたが、王は「今やこの布施により身は福田の中にある、これよ

り確かな財宝はない」と合掌礼拝したとのこと。しかし諸国の王が、この施した品々を買いたいとして戒日王に献上したので、王は又もとの様な姿になったとのことですから、徳川の外様大名政策に似た、それより意義ある面白い布施行だと思えます。

## 帰路

戒日王のこの一代の盛儀をみやげに、玄奘は沢山の法典等を持ち、別れをおしむ多くの人々をあとにして帰途についたのです。この時玄奘は四十才でした。

## インダス河渡河の水難

印度に來た時の道を辿って十数ヶ国を通り、山岳地帯では数度盜賊に出会ったが、僧侶が百人も供をしていたし、その都度、

「持物は仏典や、舍利などで、金目のものは全くない」と云って、盜賊の危害をのがれて、無事インダス河の渡舟場に出ました。

經典の外インドの珍しい花や種子などを舟についで河の中間まで行くと、俄かに風がおこり、舟は覆没しそうになり、そのため貴重な法典五十そうと、花や果物の種子などが流されてしまいました。

この河は花や果物の種子をもちこむと、必ず風波がおこるとのことです。

ようやく対岸にたどりつき、出迎えに来てくれた、カピシヤ国王に導かれて、城に行き、失った經典を補充すべく二ヶ月も滞在してしまいました。

それから数ヶ国を通り、アフガニスタンに入り、ヒンズークシ山脈(雪山)の險路をこえて、活国(クンドウズ)に辿りつきそこから来た時の道と別れて西進して、ヒマタラ国につきました。

### ヒマタラ国の奇習

この国には面白い風習があり、既婚の婦人は頭上に高さ三尺ほどの木製の角をいただいております。

これは夫の父母を示すもので、その一人が死ぬと角を一本をとり去り、二人死ぬと全部とり去ると云うことで、これは両親を大切にする現われで、パバーぬぎの現代っ子には思いもつかぬ風習でしょう。

これより世界の屋根と云われている、パミル高原の大渓谷を通るのですが、西域記にも、

「この渓谷は東西千余里、南北百里、雪山これを取りまき草木全くなき死の谷である」と記るされている。

ここでも群盗に出会い忠実だった巨象も遂に水にお

ぼれて死んだ程で、帰路に於ける最大の苦難であったようです。そしていろいろの苦難や珍らしいところを通りホタレ国につきました。

### 唐の太宗皇帝へ上奏文

ここで初めて、唐の天子へ上奏文を送り、

「十余年前国法を破って出境し、ようやくホタレ国まで帰ってきたが、忠実な象等は溺死し、盗賊におそわれ書籍等運ぶ馬匹も手に入れることが出来ず、帰心矢の如くです。何率入国をおゆるしく下さい」と記して、隊商群にたくして長安に送りました。

皇帝は非常によるこび、通過する国々に勅を下し、人夫、乗物などに不自由のないように手配したので、その後は旅行も苦勞が少なく、出国の時苦心して脱出した楼蘭ろうらんを通り無事長安に帰ったのは、貞観十九年ていけんの正月で出国以来十八年目で四十三才でした。

密出国してから名高い「ガンダーラの仏跡」等における玄奘の足跡については、パキスタン、アフガニスタンの旅路の折にかいて見たいと思います。

(以下次号)合掌

昭和四十四年九月 江古田にて

吉祥天彫刻のかたわら執筆



## 西遊記 (其の八)

### 南極寿星

「これで無事泰平と考えましたのに、意外やまたまた天宮をさわがせました。幸にも如来のお力でこの妖怪が収伏され、お礼の宴が設けられる由、伝え聞いて参上いたしました。これと云ってさし上げるものもありませんが、ここに紫芝(仙薬の名)なる仙草と璧藕(仙人の食する蓮根)の金丹をたずさえましたので拝呈つかまつります」

如来は喜びの礼をのべて、贈りものを納めた。

南極寿星が座につくと、赤脚大仙が到着した。まず玉帝にあいさつし、これは又如来に向かって感謝のことはを述べる。

「偉大な法力によりまして妖猿を降伏させていただきました。何もさしあげるものとしてありませんが、ここに交梨二個、火棗<sup>かそう</sup>数個とをたずさえましたので、どうかお納めを」

如来はまた礼をのべ、阿難<sup>あなん</sup>、迦葉<sup>かえつ</sup>に、献上の品々を

納めさせ、玉帝に宴の礼をのべていると、巡視の仙官がやって来て、

「かの大聖頭を出しかけました」

と告げた。如来は「ごけねんにはおよばぬ」と云いながら袖の中から一枚の札をとり出した。それには、「唵嘛呢叭唵吽<sup>おんまにぱいおうん</sup>」と六つの金字がしたためてある。それを阿難に渡して、かの山の頂上に貼つて来るように

と云いつけた。阿難は札をうけとると、天門を出て、五行山に行き、山頂の四角な石にびったりと、それを貼りつけた。すると山から根が生え、大地にくっついてしまった。しかし悟空は、呼吸にはさしつかえなく、手も外に出せし、少しぐらいなら身動きもできるのであった。阿難は帰って報告した。

「札を張りつけて参りました」

如来は玉帝はじめ諸神にいとまを告げ、阿難・迦葉の二尊者をしたがえて天門を出たが、そこでまた、慈悲の心を発せられ、真言の咒をとなえてひとりの土地神を召すと、この山にいて、五方掲諦と力をあわせ、悟空をかん視せよ、そして悟空が飢えれば鉄のたまを食わせ、かわけば銅の汁をのませるよう云いつけられた。そして罪業のつぐなわれる日をまてば、おのずから助ける人もあるう、と云うわけである。

## 二人の怪物

五行山をめぐって雲が走り、風が吹いて、いつか長い五百年が過ぎた。

釈迦はいつも、天竺に靈山あるあの大雷音寺にいた。

ある時大勢の仏を集めて曰く、

「わたしのところには、三つの蔵いっばいの経文がある。経文の数は三十五部で、一万五千一百四十巻にわかれていて。あのお経を、できるだけだけおおく南せんぶ州につたえたい。そして、あれた人びとのたましいをすくいたいと思うが、天竺までとりにきてくれるものはあるまいか。いうまでもなく、くるしいこと、つらいことは、山ほどあるう。だが、仏の道をひろめ、人をしあわせにするために、このやくめをつとめてくれる者はいないだらうか、その人をさがしてもらいたい。仏さまたちを、見まわした。

「わたしに考えがあります。」こういって、すすみでた者があつた。それが観音さまであつた。

「わたしが、その使いを見つけてまいりましょう。いつものように空をいったのではわかりませんから、この度は地上を歩いてまいります。」

「おお、あなたがいってくださいるか、では、これをお

もちなさい。」

そこで阿難・迦葉に命じ、錦らんの袈裟一領、九環

の錫杖一ふりをとり出させ菩薩に向かい、

「この袈裟と錫杖とは取経の者に与えて用いさせるが

よい。もし道心堅固にここまで参るようなら、この袈

裟を着用する限り輪廻りんねにおちいることもなからうし、

又この錫杖を手にする限り害毒に遭う事もあるまい」

菩薩が礼をして拝領すると、如来はまた三つの輪を

とり出し、菩薩に手渡し、

「この宝は緊こ児と申すもの、どれも形は同じだが用途は一樣ではない。わたしには金、緊、禁と三篇の呪文がある。もし途中で神通広大な妖魔にでも出あつたら、仏の理を会得して、かの取教の者の弟子になるよう勧めてほしいが、もしその者が云いつけに従わぬようなれば、この輪を頭にのせてやれ。さすれば、おのずと肉に根をはる。そのうえでそれぞれの用途に応じて呪文をとなえれば、まなこはとび出し、頭は痛み、ひたいは裂け、かならずその者を仏道に帰依さすことができよう」

菩薩はこれを聞いて勇み立ち一礼して退出すると、さっそく恵岸行者に同行を命じた、恵岸は重さ千斤の生鉄あらねの棒をたずさえ、菩薩のかたわらを片時もはなれ

ない、菩薩は錦らんのかさを一つの包みとして恵岸に背負わせ、緊こをふところに、錫杖をたずさえて靈山をくだった。

菩薩が山のふもとまでくると、玉真観の金頂大仙が道観の門前に出迎え、菩薩に茶を献じた。

菩薩、

「わたしは如来の法旨をうけて東土へ取経の者をもとめに参るのです」

大仙は尋ねた。

「取経の者はいつみえますか？」

「それはわかりませんが、二三年のうちには到着するかもしれません」

菩薩は大仙にいとまをつけて進んで行った。

師弟ふたり、行くほどに、突然川はば三千里の弱水にさしかかった。すなわち流沙河である

「恵岸よ、ここは難所です。取経の者は、凡骨凡胎どうして渡ったものだらうね」

と、菩薩が、雲脚をとめて眺めていると、河の中でザブンと云う音と共に、波の中から妖怪がおどり出した。まことに醜悪なつらぐま。怪物は、手に一振りの宝杖をたずさえ岸にあがるや、菩薩につかみかかろうとする。と、



### 流沙河の戦い

待てっ！

と一声、

はやくも恵岸の鉄の棒にさえぎられた。

怪物は宝

杖をふるっ

て迎え打ち

ふたりは流

沙河のほと

りで、追いつ

追われつ

渡りあうこ

と数十合に

およんだが

勝負がつか

ない。

かの怪物、

恵岸の鉄棒

をさええな

がら、

「お前はどこの和尚だ。よくもまあおれに手向いするな」

惠岸、

「わしは托塔李天王の第二太子木叉、惠岸だ。そういうお前こそなんの化け物だ。われらの行手をじゃまだとするな」

怪物は、はじめて覚った風で、

「あんたは南海観音のところへ弟子入りして、紫竹林（普陀落伽山にある）で修行していると聞いていたに、どうしてこんなところへ来なすった」

怪物はそれを聞くと、つづけさまに、はーッと声をあげて宝杖をすてた。惠岸に引っぱられて菩薩の前に出ると、こうべを下げて伏しおがみ、

「菩薩さま、わたくしめの罪をおゆるし下さい。わたくしは妖魔ではありません。もとは靈齋殿で、らんよにはべっていた捲れん大將なのですが、蟠桃大会に、ふと手をすべらして破りのさかずきを割ってしまいました。玉帝は、わたくしをむち八百の刑にして、下界におとし、こんな姿に変えてしまったうえ、七日に一度、鋭い剣をとばして、わたしの脇腹をつらぬくのです。それでわたしはこのようにくるしんでいるので

す。ところが、餓えと寒さは、どうにもならず、二三日に一度は波間から出て旅人を喰っておりましたが、きょうは、はからずも大慈大悲の菩薩さまにご無礼をはたらいてしまいました。」

と云えば、菩薩、

「そちは天上で罪を犯して下界に流されたというのに、今またそのような殺生をやっては、罪のうわぬり、と云うもの、わたしは今、如来の旨をうけて東土に取経の者をさがしに行くところです。なぜそちは、わが仏門にはいつて善果に帰依し、取経の者の弟子となり、西国へ参って仏を拝し経を求めないのです。剣はわたしが飛んで来ぬようにしてあげます。功成り罪ゆるされたあかつきは、また原職に復することもできません。どうです？」

怪物

「わたくしは良い果報を得とうございます」

と云って、さらにことばをつぎ、

「けど菩薩さま、わたしはここで数え切れぬ程の人間を食いました。これまでに何回も取経の人が来ましたが、みなわたくしが食ってしまったのです。食った人間のされこうべは流沙河に放りこみ、水のそこに沈めました。この水は鷲鳥の毛みたいなものでも浮かばな

いのですが、ただ九つの取経者のされこうべだけは、水に浮んだまま、どうしても沈みません。わたくしは珍しいことに思って、ひもで一つにくくり、ひまな時はとり出して、手なぐさみにしております。そんなわけで、せつかくあなたさまがおいでになっても、取経の人はもうここへは来ないかも知れません。そうなたら功名どころではありませんが」

「いえ必ずやって来ます。そのされこうべは、くびにかけていなさい。取経の者が来れば、きつと使い途もあろうほどに」

「そういうことでしたら、受戒させてもらいます」

菩薩は、さつそく摩頂受戒の儀をとり行ない、流沙河にちなんで姓を沙とし、法名を沙悟浄さごじょうとつけた。これは即座に沙門に入り、菩薩を送って河を渡らせる、すっかり心を入れかえて二度と殺生はせず、ひたすら取経の者を待つことになった。菩薩は悟浄を残し、恵岸とともに、ひたすら東土にいそいだ。

行くことしばし、また行山に高山が現われたが、山に悪気がたてこめ登ることができない。雲にのつて山を越そうとしていると、突如狂風が吹きおこると見るや、またもや妖怪がおどり出た。こいつも顔は凶悪そのもの、手にまぐわを持っていたが、菩薩を見るや、

えものをふりあげ、しゃにむに打ちかかる。恵岸はさえぎり、

「そこなばけ物！無礼は無用ぞ。わが棒の腕を見よ」

と一かつすれば、妖怪ようかいまた、

「この和尚、命知らずなやつだ。おれのまぐわをくらえ」

と応ずる。ふたりは山のふもとで、しのぎをけずって勝負をあらそった。戦いたけなわの頃おい、菩薩は中ぞらから、まぐわと棒との間に蓮の花を投げおろした。怪物はこれを見て、おどろき、

「お前はどこの和尚だ、何やら「眼くらましの花」など使って、おれをたぶらかそうとしやがる！」

恵岸すかさず、

「この化け物、眼がないのか。おれは南海菩薩の弟子だぞ。これは、わが師匠の投げおろされた蓮の花、お前にそれがわからぬか」

「南海菩薩だって！そりゃあ火水風の三災をはらい八難を救いたもう、あの観世音菩薩のことか？」

「その方でなくて、どなただというのか！」

怪物はまぐわを放り出し、頭をさげてひざまずき、

「兄貴、菩薩はどこにおられる。どうかわしに引き合わせてくれ」



恵岸はふりあおぎ、

「あれにおわすではないか」

怪物は上手に向って叩頭し、大声を張りあげ、

「菩薩さま、どうぞおゆるしを、どうぞおゆるしを」

菩薩は雲

を下げて近

より、たず

ねた。

「そちはど

この化け猪

か、もしくは

は、いずれ

のいたずら

豚か、こん

な処にいて

わたしのじ

やまをする

とは！」

「わたくし

はいのしし

でも、ぶた

でもありま



能悟猪くのみど

せん。もとは天の河にいた天蓬元師ですが、酒によつて姉娥にたわむれたために、玉帝はわたくしをつちで二千回打つて下界におとしたのです。

この世できれいさっぱりまっとうな者に生まれ變つてやろうと、胎内に宿つた方がいいが、どう道をまちがえたものか、それがめす豚の腹の中、それでこんな姿になつてしまったのです。わたしは、そのめす豚をかみころし、ほかの豚どもを打ちころして、ここで山を占領し、人間を食つてくらしておりましたが、思いがけなく菩薩さまにお会いできました。どうかおたすけ下さいまし」

「この山の名はなんといひますか？」

「福凌山と申しまして、山中に雲棧洞というほら穴が

あります。ほらには、もとは卯二姐という女がすんで

おりましたが、わたくしがいささか武芸をたしなみま

すのを見て、わたくしを迎えて亭主といたしました。

まあ、いりむこと云つてもよいでしょう。一年もたた

ぬうちに女は死にましたので、ほら穴中の財産は、全

部わたしのものになりました。ここにはもう長い間す

んでいますが、衣食するてだてもないまま、ただわた

しの生地そのまま、人を食つては日を送つておりました。

どうかわたくしの罪業おゆるしく下さいまし」

「むかしの人が云っています、末の事を思うなら、めつたなことはするでない、とね。そなたは天上界で法をおかしたと云うのに、今なお悪心を改めようとせず、殺生をやつて罪造りをしている。これこそ『二罪はともに罪す』と云うことになりませうぞ」

「末のため、末のためか！ お前さんの云うことを聞いてちゃア、風でもくつてなきやなりませんよ。ことわざにも、お上のおきてに従がやアたたかれる、仏のおきてに従がやア腹がすくつてね。やめた、やめた。旅の者や油のつたよそのかみさんのをくつていた方がました。二重の罪が三重、千重万重になつたてかまうもんか」

「人の願いがよいことなら、天は必ずきいてくださる。そなたが正果に帰依すれば、身を養う道はおのづから開けてくるものを。この世には五こくと云うものがある、どれだつて餓えをしのぐことができるというのに、どうして人間を食べて生きているのです」

怪物は、そのことばをきくと、はじめてゆめからさめ、

「おいらは、まともになりたいたんだが、なんともはや、罪を天に得てしまったんだから、もう祈るところがありませんや」

「わたしは如来の旨をうけて、東土へ取經の者を尋ねにまいるところですよ。お前は、その者の弟子となつて、西天に行つてくるがよい。そうすればその功によつて罪はつぐなわれ、わざわいからのがれられることは必定ですよ」

きいて怪物

「お伴します、お伴します」

とふたつ返事。そこで菩薩は、怪物に摩頂受戒し、そのからだにちなんで姓を猪とし、法名を与えて、猪悟能と呼ぶことにした。悟能は、菩薩の云いつけにしたがつて、まともな人間にかえり、ときをまもつて五輩三厚を絶ち、ひたすら取經の者を待つことになつた。かくて、菩薩は惠岸とともに、なかば雲霧にのりつ前進を続けた。と今度は中空に一匹の竜が泣きわめいている。菩薩が近づいて、

「そちは何者か。どうして処罪されたのです」

と尋ねると、竜

「わたくしは西海竜王救潤の子です。火事を起こして御殿の珠をやいてしまったことから、父王が天上に、わたしを親不孝者だと訴えました。玉帝はわたしを宙づりにして、三百むち打つたうえまもなく死罪にするというのです。どうか菩薩さま、お助けください」

(つづく)

## 絶 対 時 の 信 仰 心

竜昌寺住職の岡本硯翁師は、かつて曹洞宗両本山の特派布教師として有名な方です。

師の百話の中に、

「ああ、やっぱり、世の中には仏さまも、観音さまもないのだ、宗教は一種の気やすめにすぎないのか」

と長嘆息をもらしたが、彼は絶対絶命であり、観音堂の階段にぬかづき、

「大慈大悲の観音さま、どうぞ、私の希望をかなえてくださいませ、お参りも今晚かぎりです。そして、私の一生はこれでつぎるのです。どうぞ、お救いくださいませ」と。

声はちいさいが、血のにじむ、力一ぱいの祈念をこめた、この時、

「もしもし」

と、よぶこえがきこえる

「もしもし、こんな所にねていては、お体に毒ですよ、お起きなさい」

気がつくのと、いつの間にやら、夜はあけている。そして、かたわらに一人の老婆がいて、

「朝まいりにきて、眠くなったでしょう、わたくしも

毎朝、参詣にきます」と、

いとも、気やさしい老婆である。彼は問われるまま

に、一切のことを話した、すると老婆は、

「それはそれは、お気の毒なこと、私もたくさんの持ちあわせの金はありませんが」と、

いいながら、ふところから財布をとりだし、底をはたいて、彼のまえに、さしだした。

一応遠りよはしてみたが、葉代はもちろん、受験料の金十円さえない現在なのだ。

「では拝借させていただきました。私は芳賀喬一と申します。あなた様のお名前は……」

と、いった時には、すでに老婆の姿はみえなかった。「ああ、ありがたい、それにしても、あの老婆は、もしや、観音さまのご化身では……」

と、思うと、にわかにか、芳賀喬一の全身に活力が加わった。これぞ、絶望のドン底から、うかびあがった力なのだ。

### 観音の化身

「観音さまのご化身だ」と思うと、勇気が百倍すると同時に、病気はどこか消えうせたようである。

その年、首尾よく、弁護士試験に合格した、彼のよろこびはいかばかり、間もなく、妻子をよびよせ、そ

の後、法学博士の学位をうけ、東京市内でも、有数の大弁護士となり、五六名の書生を学校に通学させるようになった。

おちぶれて、袖になみだのかかる時

人の心のおくぞ、しらるる

風呂へもはいれず、理髪もできず、貧乏のドン底におち、そのうえ、大病人になった時、あのお婆さんのおめぐみがなかったら、この芳賀喬一の一身もなくなつたはず

「あのお婆さんは、はたして、観音さまのご化身だらうか。

もしも、人間であつたなら、あるとき、「私は芳賀喬一です」と、申し上げたことを、覚えていて、くださるかも知れぬ。

なんとかして、今いちど、お目にかかつて、お礼をもうしあげなければ、おれは恩しらずだ、人間ではない」といろいろ考えた結果、日本一、人の集る浅草の観音様の仁王門の両柱に、八貫目の大草履を奉納して、そして「芳賀喬一」と書いた名札をさげさせて、いただいたと云う、そしてお婆さまへの、再会を希念したと云う。

観音妙智力、能救世間苦、まさにこのことでした。

### 鳥居観音年中行事

- |         |                  |      |
|---------|------------------|------|
| 一月 一日   | 新年祈禱会            | 午前十時 |
| 一月 二日   | 〃                | 〃    |
| 一月 三日   | 〃                | 〃    |
| 一月 十七日  | 月例法要（毎月十七日）      |      |
| 二月 三日   | 節分会              |      |
| 二月 十五日  | 釈尊涅槃会            |      |
| 三月 彼 岸  | 彼岸念仏会            |      |
| 四月 八日   | 釈尊降誕会            |      |
| 五月 十七日  | 春季大祭 御詠歌大会       |      |
| 六月 十七日  | 月例観音経誦誦会         |      |
| 七月 十日   | 四万六千日特別法要        |      |
| 八月 十六日  | 盂蘭盆会 観音講祖霊供養会    |      |
| 〃       | 流灯大供養会 花火大会 盆踊大会 |      |
| 九月 十七日  | 観音経誦誦大会          |      |
| 九月 彼 岸  | 彼岸念仏会            |      |
| 十月 十七日  | 御詠歌大会            |      |
| 十一月 十七日 | 秋季大祭             |      |
| 十二月 八日  | 釈尊成道会            |      |
| 十二月 十七日 | 観音講祖霊供養会         |      |
| 十二月 卅一日 | 除夜特別供養会          |      |

# 謹賀新年

昭和四十五年一月元旦

飯所親川	埼玉フジサッ	浦和	茂木	同和	埼玉トヨベツ	白雲	不二サッ	狭山	サヤマ不二講中	講中二名									
能沢	友越	川口	浦和	与野	武蔵野市	川崎		狭山市		地区名									
武居	齊藤	原田	野口	荒川	藤沢	茂木	井上	梶谷	宮沢庚子生	飯塚	佐野	青木	小高	清水	井上	石川	平井	片山	講元及役員名
藤吉	定治	新作	愛助	安正	帝	落喜	正雄	真一	利	由利	友二	逸平	金三	逸平	竹吉	求助	敏治	道則	

篠川	エ	毛呂山	加須	坂戸	豊岡	秩父	八王子	喜代	片倉	東光	福屋	浜田	五日市	大柳	青梅	青梅	観音	西武	福壽						
川口	一	呂山	須	戸	岡	父	王子	代	倉	光	屋	田	日	柳	千ヶ瀬	梅	セン	弘所	講中						
東京	市	本庄	加須	坂戸			王子	代	倉	光	屋	田	日	柳	千ヶ瀬	梅	セン	弘所	講中						
飯塚	孝司	岸本	森	宇和野	若松	磯田	粕谷	鈴木	小池	松本	内田	喜代	平林	鈴木	新妻	吉崎	鈴木	若林	荒井	小峰	荒井	宮沢	竹井	横川	植竹
秀雄	孝司	寿雄	正雄	正数	正数	宗一郎	志	と	清	忠太郎	菊代	永政	賢恵	国仁	次郎	弘	嘉三	五郎	モト	久治	多一	庚子生	貞雄	一郎	真三

講 中 名	地 区 名	講元及役員名
大 和講中 名 栗々	東 京 名 栗 村	時田毅三郎 並木 たけ 平沼寛一郎 吉田仙太郎 吉田長太郎 岡部健次郎 岡部 千三 平沼 幸一 浅見 寅雄 町田仲太郎 田島 伝治 (敬称略)

### 白雲山鳥居観音新春のご案内

当山では一月元旦から三日まで午前十時より、本堂  
におきまして、新年の祈禱を執行いたします。

前号(十月一日発行)しおりでもご案内いたしましたし  
たが、改めてお知らせいたします。

一、祈禱料 金参百円・金五百円・金壹千円の三段階  
一、願意種別 家内安全、交通安全、身上安全、

当病平癒、商売繁昌、安 産、

一、申込所 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音  
電話〇四二九七〇四―二七五  
一、七観音のお札 十二支外各種お守りもあります

### 観世音センター新春のご案内

当センターでは、毎年正月から三月まで、比較的閑  
かですので、気安くお越しいただき、山のもの、川の  
ものの料理を召し上って、名栗川にのぞんだ風呂に浴  
されて、大広間、舞台もありますので、一日ゆっくり  
たのしんでいただくよう心がけています。

おまちしています。

#### 記

一、入場料 大人金百八拾円・小人金百円

団体は割引に致します

一、宿泊料

一、金千五百円 二食付(午后四時より  
一、金千八百円 二食付(午前九時より

一、その他当地の川魚のフライ、山芋料理、川鱈の塩  
焼などもお申し込みにより出来ます。

新年宴会に、ご家族でのたのしい食事に、又小グル  
ープのご会合に是非共ご利用ください。

#### 鳥居観音のしおり 第十三号

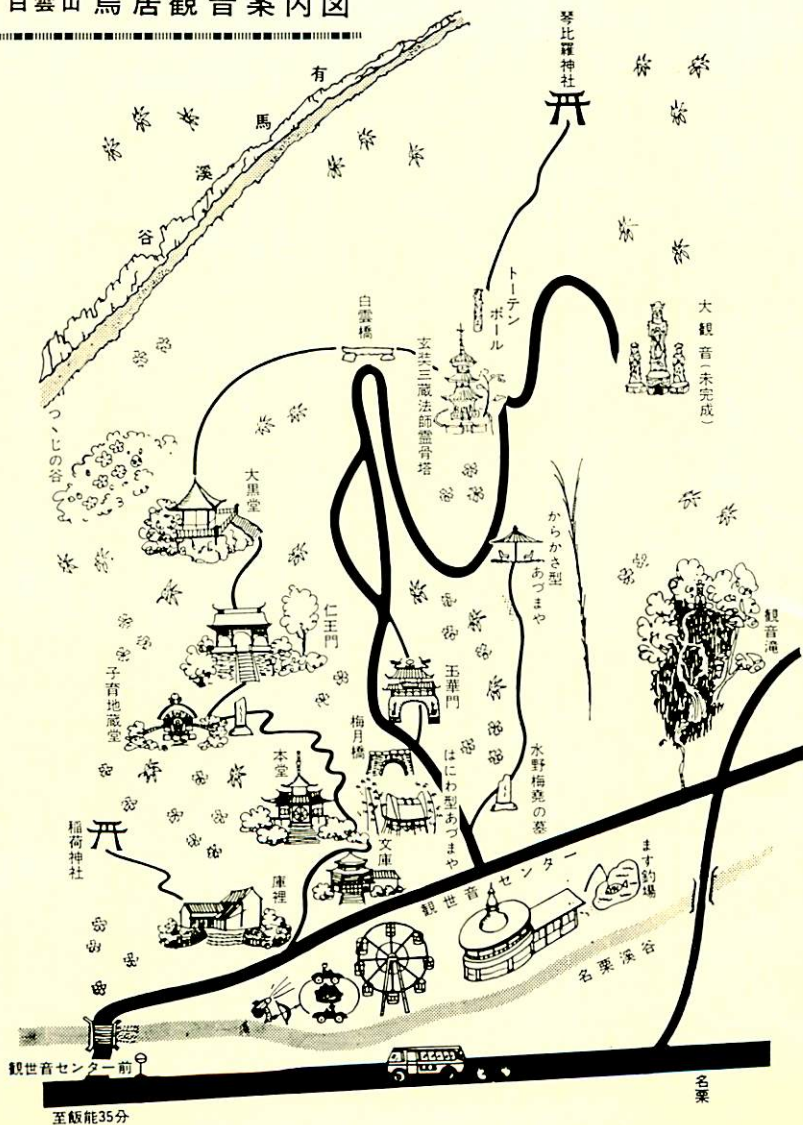
発行日 昭和四十五年一月一日 毎号定価貳拾円

編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三  
発行人

印刷所 浦和市 武州印刷株式会社  
発行所 鳥居観音

電話 〇四二九七〇四―二七五番

# 白雲山鳥居観音案内図



秋葉山

大観音（建立中）

→ 観音滝

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目傘四阿

玉華門

壺輪型四阿

梅坑之墓

楳月橋

本堂

観音文庫